yuri-rei 2012 winter

目次

12月3日

じゃんっ

ここが星館校舎です!

星館校舎は城女生が一番長くお世話になる場所です

今から一階にある…

わっ

ガンッ

あら
ごめんなさい
新入生の
皆さん！
古文の
園生月代先生です
おおっ
ナイスタイミンッ！
先生なんですよ
先生なんですよ！
なんで
二回言うのー
えへへ～
いま 先生が
出てきたのが
職員室です
では
中に入って
先生方を紹介
します！
ズビシッ
はい
カット
ごめんね
撮影中って
気付かなくて
大丈夫？
ええ
大丈夫です

あたしが鮮やかに
アドリブっちゃい
ましたから！

華麗に！

自慢ウザ

うふふーん
音七ー
つぎの台本
見せて～

沙紗さんは副部長だっけ？
羽美のブレーキ役ですよ
みんなしっかりしてきて先生は嬉しいな
…そうですかね
ハネすぎ
しっかり……ねぇ
はいっ
自覚ないなぁ

ここが
城女生の憩いの場
大座敷でーす
寒い時期には
コタツが出してあるんです
いいでしょー!
すや…
この子は
仕込みで置いたのに
マジ寝してる友達です
音七ー
音七ー
Zzz…
…
駄目かな
駄目だろ
朝から動きっぱなし
だったからな
じゃあ
今日はここまで!

ぼふっ
ふぃ――
映像チェック
ここでやるー
…ハイハイ

あんま
テロップ
入れたくないなー

すー
すー

しっかりか…
確かに
部長らしくは
なってきたな
ん
あと……

可愛くなったよな

やっぱり恋人になったからかな

動きっぱなしは
羽美も
だったしな
沙紗……
ドキ
あたしの夢
見てるのか？
な
…キス
したいな
なに
口走ってんだ！
音七も
居るのに…

んにっ!?

ごめん
寝てた

いっ今
起きたのか?

ごめん

ちょっと前

ねーねー

?

しっかりなんか
出来てないよ
園生ちゃん

END

友達想い

睦月たたら

あ、また一つ、鐘が鳴った。

さっきよりもまたちょっと、大きく響いた気がする。いちばん最初に聞こえてきたのよりもずいぶんと。それに気づくと、やっぱ近くまで来てるんだなって思う。

「この鐘は、お隣のお寺さんのなのよ」

隣の隣を歩いている結奈が教えてくれた。へー、そうなんだ。

「元々、一緒のお寺と神社だったんだけど、明治の時に別れたそうなの。まぁ、隣同士なんだけどね」

「ん、小学校の時に習ったよね」

ああ、あったあった。小学校の時に郷土史ってやったっけ。あたしも地元の歴史とか習ったな～。もうけっこう忘れちゃってるけど。結奈とひなちゃんはお隣同士だもんね、当然、小学校も一緒だから習ってることは一緒か。あたしんとことは、内容、ちがうな。

「神仏分離」

「そうそう、よく憶えていたわね」

「ん」

あたしと結奈の真ん中にいるひなちゃんがうれしそうな顔してるの、見えなくてもわかる感じ。ひなちゃんの短い返事のちがいもわかってきたけど、しかし、なんだかこの二人、ほんとに仲のいい姉妹みたい。まぁ、幼なじみだしずっとこんな感じなんだろうけど、まるっきり変わってこないってのもある意味すごい。

だってさ、二人とも、もうただの幼なじみじゃないでしょ？　ほら、恋人同士、なっちゃったでしょ？　もっとなんていうかこう、ラブラブでキャッキャウフフになったり、逆に気恥ずかしさいっぱいでもどかしさ山盛りとか、そういうふうになったりしない？　この二人もそんなふうになる、そう考えていた時期があたしにもありました。まぁ、ほんとに付き合い長いから変えようがないのかも。

あたしの見たところ、結奈は最初の方、それなりに意識していたみたい。まぁ、あんだけ悩んで出した結論だもんね。でも、ひなちゃんのマイペースっぷりというか、あまりの変わりなさに引っ張られちゃった感じ。まぁ、さすがに修学旅行の五日間、離れ離れになっていた時は、ひなちゃんがちゃんとご飯食べてるかどうか、食事のたびに心配してたけど。いや、その心配もおかしい。あんたはおかんか。

「ふぁぁ～」

心の中で友達にツッコミ入れたバチなのか、間抜けな欠伸が出てしまった。

「阿野、眠いんじゃない？　大丈夫？」

「あ、うん、平気～」

「戻ってきたばっかだったんでしょ？」

その通り。六時間前までは、東京にいました。例年通り、この四日間は東京のおばさんちに、泊まりに行ってました。もちろん、コミケに参加するため。三日目の今日は昼過ぎに有明を抜け出して、おばさんちで荷物をまとめて、こっちに戻ってきて。ほんのちょっとだけ、家にいた後、結奈んちにお邪魔して、おそばいただいて、こうして二年参りに。

「平気平気～。去年だってこんなもんだったしね～」

そうそう。去年だって大晦日までおばさんちにいて、帰ってきたのは深夜だったし。結奈はコミケが大晦日までやってるって知らなくてあたしを誘ってくれたみたい。ふふ、そんなに甘いもんじゃないのだよ。それを知った後、無理しなくていいなんて言ってくれたけど、無理しちゃいますよ、こんなお友達イベント発生なら。

まぁ、あたしの方も、OKしちゃった後、あ、やっぱやめとけばよかったかな～なんて思ったりもしたわけだけど。だってさ。

「比奈、寒くない？」

「ん、平気」
ひなちゃんはいつものようにジャージにウィンドブレーカー。この寒いのにハーフパンツだから、あったかそうなウィンドブレーカーの裾からのぞく足がまぶしくもなんか寒々しい。あたしも結奈も、コート着こんでストッキング二枚重ねとかだから余計にね。一昨日雪が降ったとかで、歩くたび、ブーツで凍った雪がジャリジャリ鳴ってる。うん、ほんと寒いや。ひなちゃんもポケットから手を出して、息を当ててこすり合わせている。この子はもう、手袋もつけてなくて。
「ひなちゃん、ほんとに大丈夫？　あたしのミトン、貸してあげようか？」
「んー」
もう押しつけたいつもりでミトンを外してみた。うわ、ほんとに寒い。一瞬で指先が冷えてくのがわかる。
そのミトンを持ったあたしの手をひなちゃんはじっと見つめたあと。
「ん」
「ひわっ!?」
いきなり、手の方をぎゅっとつかんできた。
「わ、あのちゃんの手、あったかい」
「ちょ、ちょっとひなちゃん!?」
そのまま、その握った手を自分のウィンドブレーカーのポケットに押し込んで。
「こっちの方があったかい」
笑顔でそう言う。いや、その笑顔はとってもまぶしくていいんだけど。でも、でも。
「あら、そうなの？」
「ん。カイロみたい」
「どれどれ？」
「ちょ、ちょっと結奈まで!?」
結奈が後ろを通って、あたしの反対側へ。そして、ミトンを取り上げてあたしの手を！
「あ、ほんとだ」
握って、コートのポケットに。
「うわわっ！」
そりゃあったかいはずだよ！　体温あがってるもん！　顔だって真っ赤になってるんだよ！
「やめてよもー！」
二人ともあたしを挟み込んでひっついてくる。笑いながら。やめてよって言いながら、あたしも笑ってる。なにこれ、大晦日の夜中、新年まであとちょっとの神社に行く道で浮かれる女子校生まるっきり。きゃぁきゃぁ騒ぎながら、あたしたちはゆっくりと歩いてる。まったくもう、なんなんだよ二人して～。ちょっと前までとまるっきりかわらずに、ううん、もしかしたらそれ以上に親密に、二人ともあたしに接してくれる。それはそれで、嬉しいんだけど、こんなのは恥ずかしくてたまんないんだけど。だけど、だからこそ。あたしはちょっと不安にも思っちゃうんだ。こんなことにほっとしちゃうからこそ。だってさ。だってさぁ。

「あ」
二人はまだ、あたしを解放してくれない。あたしのコートのポッケの中で、手をつないだまま。もうそろそろ限界です、離してくれないかなー。
「結奈ねえ、あそこ」
「え？」
比奈ちゃんがあたしの手を握ったのと反対側ので向こうを指さす。結奈とあたしの視線が、その先を追うと。
「あれ、双野さん？」
やっぱ、あの中でいちばん目立つのはささちゃんかな。ちょっと背が高いし、白いレースで飾られたヘッドドレスが黒髪に乗っかっててな

おさら目立ってる。もちろん、ささちゃんがいるってことは、そのそばに、ほら、うみちゃんとねながいる。
　あたしたちのいるところから、ちょっと先、神社に続く、今日は出店がたくさん出てる通りの端っこ近く。三人でこの人混みの中、あたしたちと同じようにゆっくり歩いてる。
「ね、ねなー！」
　あたしはたまらず声をかけた。きっとなんとか、この助けを求める声が届く距離。だって、ほんとにさっきから二人が手を離してくれないんだもん。恥ずかしくてたまんないから、人混みの中でこんな声を出しちゃうほど。
「あれ、遠見ちゃんたち？」
「……よぉ」
　案の定、もう一人からは声が帰ってこない。きっと、寒さで寝かけているんだろうな。うみちゃんとささちゃんが、そのもう一人を引っ張って、あたしたちの方に人混みをかき分けてくる。
「一木さんたちも来てたのね」
「うん！」
　さすがに防寒対策ばっちりだけど、うみちゃんはこの寒さにも負けずに元気そう。ささちゃんがちょっと不機嫌そうなのは、きっと寒いからかな。そして、ねながうとうとしているのは冬眠に落ちかけてるからだろう。
「でも、ここって八津岸側よ。一木さんたちって、新町から電車でしょ？」
だよね。あたしもそう。八津岸と新町は学校を挟んで反対側。あたしだって、初詣でこの神社に来たのは初めて。結奈たちに誘われなかったらきっと来ないだろうし。なんでねなたちはこっちの神社に来たんだろう。
「うん。でも、ここって学校から近くてけっこう大きな神社でしょ？　隣にお寺もあるし。だから、きっと学校のみんなもいっぱい来てるかなって思って」
「そう、ね。けっこう来てる人は多いと思うけど……」
　だからって、新町組の人が来る理由にはならないような。あっちにだってお寺や神社はあるんだし。

「そそ、だからね、今年は……ん？　来年？　どっちでもいいや。八津岸と新町、両方のいろんなとこに初詣しようってことにしたんだ！」
は～。まぁ、確かにいろんなとこに初詣で行く人っていると思うけど。それにしても、相変わらずうみちゃんはパワフルだなぁ。
「はぁ……」
　そして、あからさまにため息をつくささちゃん。きっと、うみちゃんに引っ張り出されてきたんだろうなぁ。ねなも。
「いっぱい取材してくるから、年明けのKRには期待しててよね！」
「ああ、放送の取材なんだ」
　そゆことか。最近は結奈も、うみちゃんたちの放送の日は、教室であたしと一緒にお弁当を食べてる。秋になるまでほとんどお昼の放送を聞いたことないとか言ってたのにね。
「勘弁してほしいよ、まったく……。ほら、音七、ちゃんと起きて自分で歩けよな」
　ささちゃんはそんなこと言いながらも、しっかりうみちゃんに付き合ってるし。うみちゃんと二人で、半分、いやほとんど？　寝ているねなを引っ張ってきたみたい。眠い眠いって言いながら、ねなも断らないんだな～。でも、このまんまだとろくに動けないんじゃないかな、うみちゃんもささちゃんも。
「ささちゃん、あたしがねな、支えてあげよっか～？」
「あ？　え、いや、う～ん……」
「そんなの悪いよぉ！」
　ささちゃんがちょっとどうしたもんかって答えに詰まったところで、うみちゃんが入ってくる。う～ん、この三人のキズナって強いなぁ～、なんて思ったんだけど。
「…………」
「ほえ？」
　寝ていると思ったねなが、ささちゃんの肩に押しつけていた頭を離して、あたしにもたれかかってくる。
「ね、ねな!?」
　うわわ。ちょっとこんなダイレクト。不意打ちでびっくりして、あたしは顔が真っ赤になる。

「ちょ、ちょっと音七！　阿野ちゃん、困ってるじゃん！」
「……気にすんな」
ねなはもたれかかる相手をあたしに代えたまま、ひらひらと手を、うみちゃんたちに振って見せた。いや、気にすんなってねなが言うのかよってツッコミたいけど、言葉が出てこない。
「しょうがないな……。阿野、ちょっと頼める？」
「う、うん、いいよいいよ～」
うわ、人がもたれかかってくると、ねなでもけっこう重くて歩きづらい。
「ごめんね～。あ、遠見ちゃんたちも、このままお参りするんでしょ？　じゃ、それまで一緒に行こ！」
「ええ、いいわよ」
「ありがと！　それでさ、この神社のこと、いろいろ教えてよ！」
でも、ま、いっか。うみちゃんたちと一緒になって賑やかになったことで、あたしもちょっと気が楽になった。結奈とひなちゃんにサンドイッチされてた両手も解放されたし。ま、今はねなに体半分占領されちゃってるけど。あ、うん、ほんとに結奈たちと一緒だったのがイヤだったんじゃない。でもさ、やっぱさ。

※　※　※

「あー、なるほど、確かにここだったらわかりやすい」
「ん、でしょ？　さすがは結奈だよね」
「あ、やっぱ結奈なんだ」
こっからなら拝殿の前も、そこまでの通りもよく見える。ほんとだったら参拝が終わった後の通り道というか、休憩所なんだけど、あたしとねなは一足先にここに来て、運良く空いてたベンチに座って、いっぱいの人混みを見下ろしていた。うん、まぁ、つまり、みんなとはぐれてしまったわけで。
「そそ。結奈が、もしはぐれたらここに集合って教えてくれたの」
ほんと、結奈ってこういうとこしっかりしてる。大きな神社の大晦日だもんね。人がいっぱいいて当たり前。だから、はぐれた時のことも考えて、あたしに教えてくれていた。わかりやすい簡単な地図付きで。結奈ママ最高。
「まぁ、団体行動する時の基本っちゃ基本かぁ。あたしらはそんなことしたことなくってさぁ」
「そなの？」
「そ。というかさ、羽美の頭の中には、はぐれるって想定がないんだよね」
「あはは、わかるわかる」
すぐそばの売店で買ってきた飲み物で手を温めながら、しっかり目を覚ましてるねなと話してる。
「一度だけさ、中学の時、ささと二人でイタズラしてさ、羽美を一人ではぐれさせてみたんだ」
「うわ、ひど」
「うん、あれはひどかった。二度とあんなイタズラするもんじゃないね」
うみちゃん、泣き出したりしたんだろうか。ねなの口ぶりだとそんな想像だってできる。
「ま、もうじきみんな来るだろね」
さっき、無事にみんなと連絡は取れた。
ねなたちと一緒になってから、しばらくは一緒に歩いていたんだけど、出店につられたりなんだりで、いつの間にかばらばらになってしまってた。ひっついてるねなとおしゃべりしてるうちにいつの間にか、結奈もひなちゃんもうみちゃんもささちゃんもいなくなってて、さすがにちょっとびっくりしたし心細くもなったけど、ねながいたおかげでなんとかパニックにならずにすんだ。大丈夫、平気平気なんて、ねなが簡単に言ってくれるもんだからさ。まぁ、迷子になったって慌てる年でもないけどさ、さすがに寂しいしね？
とりあえず、結奈に教わったここに移動して、みんなとケータイで連絡とって。結奈はやっぱりひなちゃんと一緒。うみちゃんとささちゃんも一緒みたいで、ささちゃんと話してる後ろから、ねなのこと心配してるうみちゃんの声が聞こえっぱなしで。
「三十分後に集合ってことにしたけど、よかったの？」

「いいよいいよ」
先にささちゃんに連絡を取ったねながそう言ったから、あたしも結奈たちにはそう伝えた。すぐに待ち合わせ場所に行ってもいないよなんてねなは言ってケータイを切ってたけど、まぁ、動くのめんどくさいってことで、ここにいるわけだけど。
「羽美と沙紗がはぐれてないってわかったからさ。阿野も心配してないでしょ。結奈と比奈ちゃんが一緒なんだし」
「うん、ま、そなんだけどね～」
そこにちょっとほっとしてていいのかな、あたし。ま、三人で来ててあたしだけはぐれたら寂しかっただろうな。でも、今はねながいるからそうでもない。
「阿野のそのかっこ、あれ？　世界樹のルンマス？」
「ん？　あ、そうそう。気づいてくれましたか」
「ん、わかった。その帽子でさ」
「偶然、見っけちゃってさ。慌ててコートも探しちゃいましたよ。ま、さすがに裾の模様とか、色とか、そのものズバリなのはなかったんだけどね～」
「いや、アナザーカラーの新しいのみたいでいいんじゃない？」
そんなこと、話しながら時間をつぶしてる。ねなとなら共通の話題多いから、こういうのも楽でいいな。
なんて思ってたんだけど。
「んで、結奈のこと、まだ気になる？」
「ふぇ!?」
不意に、切り込まれた。
「二人と一緒にここに来たの、気にしてるわけ？」
「え、えええ、べ、別に、そんなわけじゃ……」
なんで？　直前まで、ゲームの話してたのにさ。
「ない、けどさ……」
ベンチの前のテーブルに腕乗せて、そっからあたしを見てくるねなの目は。その格好は眠たげな、いつものねななのに、視線だって鋭いわけじゃないのにさ。
「……なんで、ねなにはバレちゃってるのかなぁ……」
「ま、なんとなく。いろいろ観察する機会もあったしねー。修学旅行の時とか」
「そっかぁ……」
修学旅行とか言ったって、一緒に行動したの、三日目くらいだったはずなのに。なんでこう、ねなって思いもつかないとこで鋭いのかな。
「いや、なんていうかさぁ……。もしかして、邪魔しちゃったのかなぁって……、思ったり、してさぁ……」
いや、ね？　結奈と一緒にいるのは楽しい。ひなちゃんもそう。今日だって、二人と一緒に初詣って楽しみで仕方なかった。誘われた時、ほんとにうれしかったし。
でも、やっぱり気にしちゃうよ。あたしは、結奈とひなちゃんが付き合ってるの、知ってる。お互いがどんだけ好きなのかも。結奈がどんだけ悩んでからひなちゃんに答えたのかも。知ってるからこそ、恋人同士になって、それまでと変わらず、ううん、それ以上に仲よさそうな二人を見るのはうれしい。結奈とひなちゃんのことだから、あたしが心配しなくたって、いくらでも二人っきりの時間なんてあるはずなんだけど、それでも。こういうイベントにお邪魔しちゃってよかったのかなって思っちゃうよ。
思い出す。十一月の終わりにあった、マラソン大会の時のこと。

すごいことにひなちゃんはトップ争いしながら、グランドに戻ってきた。その相手は、同じ陸上部の子なんだって。北……なんとかさん。一緒に見てた結奈が教えてくれた。十キロも走ってきた後だってのに、二人とも全力疾走。マラソン大会なんてあんまり人気のない

イベント、これから自分たちが走る番だって憂鬱というか、うんざりしてるのが大半だったあたしたち二年生も思わず引き込まれちゃうくらいのデッドヒートだった。あたしも思わず、大きな声でひなちゃんを応援してた。

最後の最後でその子を抜いて、ひなちゃんがいちばんでゴールに駆け込んだ瞬間。大声できゃーって叫んでたあたしとは対照的に。結奈は、それまで詰めていた息を、はーって大きく吐き出して。それからひなちゃんのところに走っていった。わざわざあたしに、ちょっと声かけてくるねなんて断ってから行くあたり、いつもの結奈らしいのに。あれはなんだろう。うれしさ？　安心？　誇らしさ？　いろんなものを詰め込んで、結奈はひなちゃんを見つめてた。そして、出迎えに行った。あんな結奈の顔を見たのは、あたしは初めて。駆け寄ってくる結奈を見つけてうれしそうなひなちゃんの顔も。

……あんなのを見ちゃうとさ。やっぱり思っちゃう。二人の邪魔、したくないって。

「ふーん……」

ねなの声は、なんかいつも通りで、眠いのか興味ないのかって感じ。

「あー、まぁ、さ」

でも、そっちから聞いてきた以上は、マジメに考えてくれてるのかな。

「阿野、気にしすぎ」

短く簡潔に、答えてくれた。いやでも、そんな簡単なこと？

「そっかなぁ～」

「そだよ。ま、確かに気遣われてるとこあると思うけどね。でも、向こうから気遣ってくるぶんにはそんなに気にすることないよ」

「そうなのかなぁ～」

「そんなもんだよ。どこも似たようなもんだね」

「え、どこも？」

「ま、気にすんなって」

んん？　それはさっきのアドバイス？　眠たげに視線をそらされてしまった。こうなったらもう、聞き返しても無駄なんだろうなー。

「うーん……」

気にしなくても、いいのかな？　いっつも結奈と一緒にいたいとか、そんなのない。ひなちゃんと一緒に遊ぶのも楽しい。二人から一緒に行こうって言われたらうれしい。だって結奈は友達だもん。邪魔になってないならいいのかな？　それってどこまでいいの？　今くらいならいいのかな？　誘われたらＯＫ？　あー、よくわかんない。

「そっかなぁ……」

「気にすることなく今まで通りでいいんだよ。阿野と結奈の場合はさ」

「阿野が変に意識したってキョドって気味悪がられるだけだよ～」

「な、なんだよ、それー！」

うう、ニヤニヤすんなよー、もー！　ねなのその眠そうな顔で口元だけ笑われると思わせぶり倍増だろ！

なんか、こんなことをねなに話してること自体がすっごく恥ずかしくなってきた！　そう思っちゃうと、顔が赤くなる。それをニヤって見てんなよ、もー！

「阿野もさぁ～」

「な、なんだよぅ！」

「けっこう照れ屋だよね。最近、特にそれ、ひどい。前みたいに、ヤバくなったらとっとと逃げればいいのにさぁ」

「んにゃ!?」

ななな、なにを言ってるのデスカ、ねなさん!?　あ、あたしが照れ屋とか、その、そうですけどね？　最近、ひどい!?　前みたいに逃げればって……。

「う、あぅぅ～」
「ま、いいけどね、そんなでも」
な、なんだ、こいつ。くそう、どこまでお見通しなんだよ、もー！
「もうすぐ、みんな来るかな～」
「え！？」
「それまでに、ひいてるといいね、そのほっぺたさ」
「あー、もう～！」
ほんっとに顔が熱い！　どんだけ真っ赤になってるんだ、あたしは。
ああ、もー！　あたしをこんなにしておいて、ねなは勝手に顔を突っ伏してる。この寒さの中でも寝る気か、あんたは。
あたしだって、とてもじゃないけど、この顔、結奈たちに見せられない。見せられないから、あたしもねなにならって、テーブルに顔を突っ伏した。早く、この赤いのがなおってくれますように。
まぁ、でも。
逃げ帰りたくなるわけじゃないんだけど。だってもうすぐ、結奈たちが来るんだし。

※　※　※

「ちょっと二人とも、起きてる？　ほんとに寝てるんじゃないでしょうね？」
……うん、なんとか大丈夫。間に合った。
「あ、だいじょぶだいじょぶ、起きてるよ～」
「あのちゃん、ごめんね？」
「いやいや、ノープロブレムですよ？」
顔をあげて、結奈たちを見る。多少まだ赤いかもしれないけど、まぁ、知るもんか。
「音七ぁ！　起きて！　目を覚まして！」
「うるさいなぁ、起きてるってばぁ～」
あ、うみちゃんたちも一緒なんだ。
ちくしょお、ねなはいつも通りじゃないか。あのハズカシトークの被害者はあたしだけかい。

「ごめんね、阿野。気付いたらはぐれちゃってて」
「あ～、いいよいいよ、気にしないでさぁ～。こんだけ人が多いんだもん、仕方ないって～」
どっちが悪いわけでもないのにさ。結奈のこういうとこって、ほんと、気を遣うっていうより性分なんだろね。
「もう、勝手にどっかいっちゃわないでよね！　すっごい捜したんだから！」
「勝手にどっか言ったのは羽美の方だよ～。あちこちフラフラしてさぁ～」
「だな。あっちこっち勝手に歩き回ってたのは羽美の方だろ」
「ええ！？　ひどい！　沙紗はちゃんとついてきてくれたじゃん！」
「え？　あ、まぁ、それはその……」
なんか、あっちもいつも通りみたい。ちょっとほっとする。
「ほら、合流できたんだし、お参りすませましょ」
そだね。結奈の声であたしもベンチから立つ。ねなもうみちゃんとささちゃんに抱えられて。
こっからもう一度、列の後ろ側まで戻らないとダメかな？　ダメなんだろうな。お参りする人の列の最後尾は、ここから見えないくらい、ずっとつながってる。まぁ、みんなと一緒だから暇ってこともないだろうし、いっか。
「あのちゃん」
みんなで歩き始めてから、ひなちゃんがあたしの隣まで来てくれた。こそこそと手に持った紙袋から出してくれたものは。
「ん」
「……ありがと」
これって牛串かな？　さすがはひなちゃんというか。ほんとにお肉好きなんだなぁ。結奈に買ってもらったのかな？　まだ温かくて、白い湯気がのぼってる。あーもう、なんだかかわいいな、この子は。
「食べたら元気になるよ」
「え？」
ど、どういう意味だろう。そ、そのまんまの意味かな？

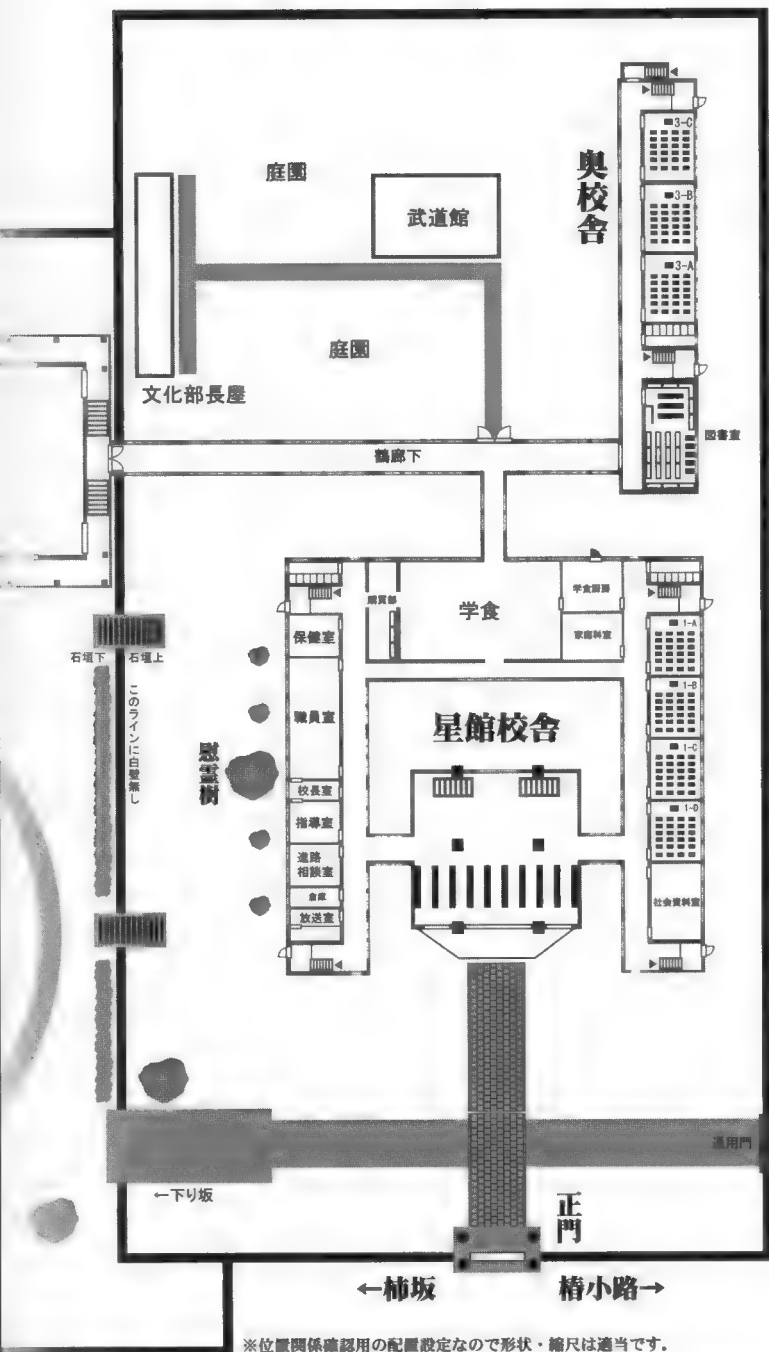
「えっと……、あたし、元気なかった？」
「ん……」
よくわかんないから、そのまま聞いてみた。ひなちゃんはあたしの顔、じっと見てから。
「そうじゃなかったかも。でも、そんな気もしたし」
そ、そっかな？ でも、お肉食べて元気になるなんて、ひなちゃんじゃないんだし。でも、こういうとこがらしいかな。ありがたくその牛串を受け取って、一口だけいただいて。
「ね、ひなちゃん」
あたしもそのまんま、伝えてみる。
「来年も、また、誘ってね」
素直に。そのままに。
結奈とひなちゃんのこと、邪魔したくないってのは本当。でも、二人と一緒にまた、こうして遊びたいのも本当。大丈夫だよね。だって、結奈はちゃんとあたしのこと、誘ってくれる。友達だもん。あたしだって、一緒に遊びたい時はそう言える。だって、ね？
「ん、もちろん」
うわ、なんてかわいい笑い方するんだろう、この子はもー！ これは結奈もたまんないだろうなぁ。ひなちゃんのこの笑顔が見たくて、料理とかがんばっちゃうんだろうな。これは、いつまでも仲良くしてくれなきゃ、困る。なんというか、困るよ、ほんとにもー。
「あ、ねぇ！」
ほんのちょっと先を歩いていたうみちゃんが振り返って声かけてきた。
「ほら、もう新年過ぎてるよね！」
そだね。みんなを待ってる間に、除夜の鐘もすっかり終わってて、今はもう新しい年。
「新年のご挨拶！ ね、一緒にさ！」
「一緒にかよ……」
「いいの！ こういうのはみんなで一緒にだよ！」
あはは、いやなに、そのせーしゅん。ほんとに恥ずかしくなるくらい楽しいな、もう。
「せーの……！」

今年はどんな年になるのかな。三年生になって、受験生になって。ま、でもそんなのどうでもいっか。
「あけましておめでとう！」
みんなで一斉に。大きな声出ちゃったよ。うみちゃんと同じくらい。あ、結奈も楽しそう。ささちゃんはめんどくさそうだけど、どこか照れた感じ。ねなは眠そう。ひなちゃんもいつも通りな感じだけど。あたしたちだけでいきなりおめでとーなんて、周りから浮いちゃっててちょっと恥ずかしいけど、ま、いっか。
今年も、いい年になりますように。

了

【K★Rとは？】
内で　がやっている　のこと。
にならって　日に　さん　をつ、やいています
興味のあるかたはツイッターで@toitentuを探して下さいませ

部分公開　商科九ツ星女子学園

庭園
武道館
奥校舎
庭園
文化部長屋
図書室
鶴廊下
学食
購買部
学食厨房
家庭科室
保健室
職員室
校長室
指導室
進路相談室
倉庫
放送室
星館校舎
慰霊樹
石垣下
石垣上
このラインに白壁無し
社会資料室
通用門
←下り坂
正門
←柿坂
椿小路→
※位置関係確認用の配置設定なので形状・縮尺は適当です。

『星館と星館校舎』
結奈や比奈達、下級生の教室がある場所です。天守跡に建てられた和洋館「星館」を抱え込むように建つ校舎なので「星館校舎」と呼ばれています。
星館は時計台を持つ2階建ての和洋館。
1階は玄関、2階には大座敷があり、部活や授業はもちろん憩いの場としても使用されています。冬場はコタツが用意される学生の人気スポットです。
星館校舎は3階建て。放送部室、数理部室などもこの校舎です。百合園さんが居た屋上は左棟。右棟の屋上は開放されておらず天文部などしか出入りしません。

『奥校舎』
相原や網島達が過ごしている場所です。
星館より奥にあるので奥校舎。星館学食から鶴廊下という渡り廊下で繋がっています。静かで落ち着いた雰囲気の最上級生にふさわしい校舎です。
校舎奥の非常口外にある自販機コーナーは3年生しか使わないため大奥と通称されています。

『雲見櫓』
城の建築物を流用した施設です。街から見上げてもよく目立つ城女のシンボル。
1階は運動部部室、2階の座敷は合宿時に使用。合宿は人数を揃えて申請すれば部活外でも許可がおります。
学園は寒くなる地域にあるため冬季の宿泊は認められていません。
廊下の一画にある棚、通称「雲見文庫」は、学生達が残した新旧漫画が置かれ、合宿時の密かな楽しみになっているそうです。
雲見櫓に併設された講堂は、本丸より低い位置に建つため、二階に入り口がある変わった構造になっています。

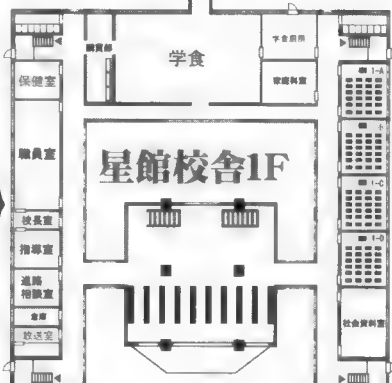
『正門』
太鼓櫓を備えた学園入り口です。
朝夕の太鼓叩きは通常、風紀委員が行いますが、遅刻者に課される罰則の一つでもあり、気合の入らねー音は大抵遅刻者のものです。誕生日の者なら朝の太鼓を打てるという校則もあったりします。

KR みんなのクラス

▼2年A組・総合クラス
教室は星館校舎左棟2階端。在籍者は結奈と阿野。のんびりとした人間が多いのか、落ち着いた雰囲気がある。担任もおっとりしているのに、ミスが少ない不思議なクラス。

▼2年B組・総合クラス
教室は星館校舎左棟2階にある。在籍者は一木・双野・三山。彼女たちを始めとして演劇部第二副部長（副座長とも）など、華のある人材が揃った賑やかなクラス。伝統的に2年D組とライバル関係にある。

▼2年C組・理系クラス1
教室は星館左棟二階。在籍者は剣峰と有遊。シロジョでは珍しい普通のクラス。あまりに普通で何かを隠してるとまで噂される始末。担任は数学教師で[illegible]生と仲が良い。

▼2年C組・理系クラス2
剣峰は「カワイイもの好きすぎな[illegible]生先生マニア」というまんまの認識。有遊は積極的に前に出ることは控えているが、相談役としてクラス委員に頼られている。彼女のアイス好きは一部で有名。

▼2年D組（文）の1
教室は星館左棟二階。在籍者は古場陽香。文系クラスらしく大人しめの学生が大半を占めるなか、陽香は浮きがちだったのですが、今ではヨーカちゃんの愛称で呼ばれるマスコット的存在です。

▼2年D組（文）の2
クラスの別名は「九星党」。伝統的に学生会長や役員を多く送り出しており、代々受け継がれている選挙対策ノートは門外不出。近年、戦績で猛追しているB組のことをライバル視しています。

▼2年D組（文）の3。
陽香がクラスに馴染んだ切っ掛けも選挙がらみです。対立したクラス会をロックに和ませた様子は……いつか語られるかもしれません。

▼2年D組（文）の4。
クラス副担任は[illegible]生月代。担任の老教師と並んで歩く姿は祖母とカワイイ孫みたいでふおおおお！と一部に評判です。教室の一画には[illegible]生先生オススメの本が並んでいます。

▼2年E・F・G組

本編には登場していないが、EFG組という商業科が存在する(希望者数によって増減)。一般的な商科とは違い、進学も視野にいれた体制が組まれているのが特徴。

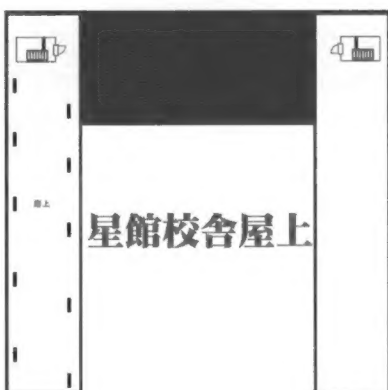
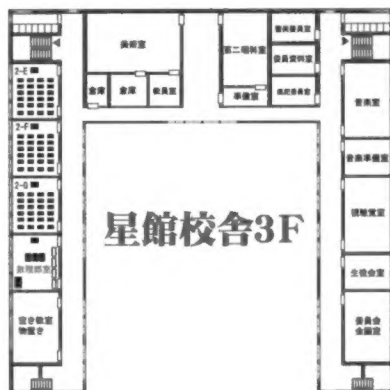
▼3年B組(商科総合)の1

教室は奥校舎二階。在籍者は相原美紀、網島茉莉、稲本美夕。当初は相原をクラス委員に推す声があったが、稲本と網島のやんわりとした反対により、演劇部大座長が務めている。

▼3年B組(商科総合)の2

クラスの雰囲気は明るい。学内で人気のある茉莉の写真を撮ろうとするものが多く、茉莉の席は最後列窓側で固定。校舎外から雰囲気のある写真が撮れる位置として写真部が考案。

▼3年B組(商科総合)の3

稲本の席は茉莉の隣。美夕はクラス内で「コーチ」という別名をもらっている。面倒見が良く怒らせると怖いことから着いたアダ名だが、本人はあまり喜んではいない。

▼3年B組(商科総合)の4

相原の「聖女」としての地位はこのクラスでも顕著。備品資料の配置を完全に把握している相原を頼って、教師が訪ねてくることも多い。

▼1年A~F組

1年は総合クラスとなっています。狛野と牧はC組に在籍。今年のC組は運動部や力強い学生が多く集まったようで球技大会・マラソン大会で活躍。肉体派の組として知られています。狛野、牧ともクラス内での関係は良好。面倒見の良いコンビとして一目置かれています。最近では一年生整美委員が牧を頻繁に訪ねてくるため、整美委員分室と呼ばれることも。

▼星館校舎第1屋上

百合霊さん達が居た開放屋上。街を見下ろせる左棟側にあり、ベンチが並んでいる。鍵が開いている限り出入り自由だが、何故か学生の出入りは少ない。

▼星館校舎第二屋上

百合霊さん達が居たのとは逆の棟にある屋上。施錠されており一般学生立ち入り禁止。小さな天文観測台が設けられており、天文部が定期的に観測合宿を行なっている。未登場。

Peg

放送部ブームだったのでニヤニヤしながら
描かせていただきました。
今までのんびりやってたので半年で３冊は
結構大変でしたが、本当に色々勉強になりました！
ご意見ご感想お待ちしております。それではよいお年を～

睦月たたら

さっさと書き上げて、ストマグネタでもう一本書くぜとか思ってましたが、そんなことできませんでした。つ、次で！ 阿野は書きやすいと思ってたんですが、やっぱりメインにすると大変ですね。それでは、2013年が皆様にとってよい年でありますように。

といてんつ

3冊目の百合霊さん本です。今回は放送部と阿野メインでお送りしました。
放送部は単体だと扱い辛いのに3人一緒だと大変よく動いてくれ、物語が賑やかになるので好きです。阿野はデリケートなポジションなので動かす時はいつもひやひや。親友キャラはこだわりがあるので大事にしたいです。
さて、百合霊さんが今後どんな展開を迎えるのか不透明ですが、いろいろ企んで、なにか形にしてお届けできるよう努力します。なにか決まったらツイッターとかでつぶやきますよ。
では、素晴しい絵を提供し続けてくれたPegさん。仕事の合間に良い小説を送って下さったたたらさん。本当にありがとうございました。なによりこの本を手に取って下さった皆様に深い感謝を捧げます。またユリトピアで会いましょう。

発行日： 2012年 12月 31日

発　行： 屋根裏出版局

発行者： といてんつ

印刷所： 緑陽社様

「屋上の百合霊さん」の本
2012 vol.3
屋根裏出版局
KR